

令和4年度一般入試個別学力検査【前期日程】「国語」 採点・評価基準

I (配点 90 点) 出典：久保明教『機械カニバリズム——人間なきあとの人類学へ』

発話コンテキストに依存しないデジタルな数列とそれを結びつけるコードによって構成される「機械的な情報」と、発話内容が発話状況と結びつくことで固有の意味を生成していく「人間的記号」。デジタル通信上のコミュニケーションは、この二つが相関しあいながら展開している。出典『機械カニバリズム』ではそのありようを「デジタルな記号」と呼んでいるが、問題文は、そのメカニズムを説明した箇所にあたる。

今回の解答で、問題文にある「統語論」を解答用紙で「統治論」と書く例が、あるいはまた「卓越性」を「早越性」と書く例が散見された。採点は解答用紙の記述に沿って行われることを忘れずに。また、文中表現を接続詞や接続助詞でつないで解答することが多くあるが、次の問題に移る前に自身の解答を確認しよう。たんに並べただけで意味のとおらない文章になっている解答が見受けられた。

問一 A 暗黙 B 含意 C 貢献 D 除去 E 寛容

「貢」の下部が「見」になっていたり、「寛」の下部が「貝」になっていたりする解答が散見された。

問二 傍線部冒頭の指示語「それ」を示したうえで、「どのような点が親和的と言えるのか」を答えよう。コンテキストに依存しないデジタルな数列とそれを組み合わせる形式的なプログラムで構成されている機械的な情報が、伝統的な言語分析の、発話の文脈に依存しない価値と文法によって言語が成立すると考える点において親和性が高いと言える。伝統的な言語分析とは何かを説明した解答が多く見受けられたが、そこを問うているわけではない。

問三 傍線部末尾に「ように」とあることから、傍線部の文意は直後を見れば明らかである。火がつけば煙が出ることから煙が火の指標となるように、発話が、発話者と聞き手の位置関係や発話の状況などと結びつくことで特定の意味を持ちうるということ。火の無いところに煙は立たないから発話内容には発話が必要、とか、物事には因果関係がある、といった内容ではない。問二が「統語論的言語観」、問三が「語用論的言語観」をそれぞれ問う問題になっているが、ここをきちんと押さえておくことで、問四以降の「デジタルな記号」、すなわち「ネ申」や「ようつべ」のメカニズムが理解しやすくなる。

問四 「ようつべ」は「デジタルな記号」であるので、問題文で指摘されているところの、「デジタルな記号の特徴は、機械的情報との接続を通じて人間的な記号の意味作用が変容する」ことを「ようつべ」に沿って説明することになる。コンテキストに依存しない機械的な情

報としては「ようつべ」は「ようつべ」でしかないが、YouTube の文脈で頻用されていくことで「正字を代替する表現」を持つようになったということ。

問五 「ネ」「申」というそれぞれ独立した二文字が、ディスプレイ上で横並びすることでひとまとまりの文字「神」として見なされ、さらにその横長の一文字が全角規格の制約から外れていることで「ネ申」が「形容する作品や人物などの特定の領域における卓越性を表すもの」として意味作用が生じること。「ネ申」を例に説明したが、「ようつべ」のメカニズムをここで詳しく説明することもできる。ちなみに、「ネ申」は「ネ」（ね/ne）「申」（もうす・しん/mousu・sin）と入力しなければ出てこない。フリック入力でもローマ字入力でも「ねもうす/nemousu」と入力して「ネ申」を出力するということは、すでに「意味作用が変容」したあと、「デジタルな記号を通じたコミュニケーションが再び既存の状況に位置づけられ」たあとの現象ということになる。

問六 （a） 機械的な情報とは、大半のコンピューターで処理できるような、使用される文脈等に依存せず意味が一意的なデジタルな数列と、それらを組み合わせるための形式的な規則によって構成されるもののこと。ここで重要なのは、「コンテキストに依存」しないとはどういうことなのかを、「一意」とか「意味を正確に伝達できる」のようにきちんと説明することである。「コンテキストに依存する」こととの大きな違いがここにある。

（b） 人間的記号とは、発話者と聞き手の位置関係や社会的関係、発話や使用時の状況などによって特定の意味を持ちうるもののこと。「記号」であるので「意味」「意味作用」が必要になる。（a）との対比で考えるとよい。「個々の文化・社会によって異なる仕方で組織されるコンテキスト」という説明も大事な箇所になるが、その「コンテキスト」が問題文中でどのように説明されているかの確認は必要だろう。ここで（a）の機械的な情報について説明をしている解答が、意外と多かった。

Ⅱ （配点 60 点） 出典：『中務内侍日記』

『中務内侍日記』より、尼崎行きの紀行文。尼崎に行った理由自体は記されておらず、不明。作者藤原経子は病弱でいつもどこか心晴れない思いを抱いており、この尼崎紀行でもそれはよくうかがえる。ただ、道中たびたび都を恋しく思い出し、ふさいだ気持ちを抱きつつも、ふと旅先で触れる景色や空気に心惹かれる瞬間があることを自覚してもおり、そういった、彼女が細かな情緒の起伏を吐露するのも読みどころである。

問一 （a） 噂にだけは聞き及んでいた、の意。実際の音ではなく、噂話というほどの意味。これはそのあとの歌「古も ありとばかりは 音に聞く 交野の雉 今日見つるかな」を参照し

てもわかる。

(b) 一通りではなく都だけが心に止められて。旅先にでていても、都のことばかり恋しく思われる作者の思いは、文中全般にうかがわれることで、読解上の鍵となるもの。後の問七にも関わる場所である。

(c) その姿も流れるように見える月、の意。状況としては「夜もすがら舟を漕」いでいるわけで、月が、水面に映っており、舟が動くとともにそれも一緒に流れているかのように見える、ということ。

問二 船に乗ろうとするけれども、どれくらいの船があるのかもわからないほど数多く、また避けられないほどの船があつて、そこへ聞いたこともないような恐ろしいような声を出している者たちがひしめいているのを聞く、という意。船着き場は大混雑し、宮中ではおよそ耳にしないであろう、船頭のような人々らの荒々しい怒声や喧噪に、一行が圧倒されている様子である。解答は全体によくできていた。

問三 日が水平線の向こうに落ちていく、つまり日が暮れるということ。正答率は高かった。

問四 吹いてくる風、立つ波も、大変激しいように思われる、の意。「心地」は現代語では自分の心情についていうことが多いが、ここでは、客観的状态について、そう思う、そう感じられるというほどの意でとるほうがふさわしい。

問五 档縄というのは絶えず海の中に引っ張られていて苦しいものだろうと思っていたが、外に干されている日もあるのだな、という意。「干す」を、休ませていること、つまり「苦し」に対する好意的な意味にとれるかが鍵。「仕事を干された」などの負の意味はここでは無関係である。歌ではよく、「干すひまもなし」と歌われることが多いのでそういったことも表現上、踏まえている。作者は現在、この風光明媚な景色に感じ入っており、普段の晴れやらぬ気持ちからすればこの档縄のありように思いを重ねている可能性もある。つまり、ずっと苦しいだけではなく、ほっとできる瞬間もある、ということであるが、歌の表現としてはあくまで档縄のこととして歌われているので、ここでは言葉に即して解釈すればよく、寓意を含ませて深く読んだ解答を、必ずしもしていなくてもよい。

問六 (a) 月だけは都とかわらないので、これだけを心のよすがにしての意。面影とあるので、人のそれだと捉えた誤答が多かった。また都そのものと捉えるものもあったが、都という大きな場所自体を「影」とは捉えにくい。ここでは続く文章に「波路遥かに月を眺むるさへ」とあり、さらに「よそに隈なき」「影」とあることから「月」であると導いてほしい。あまり、正答率は高くなかった。

(b) 言葉のままに解釈すれば、よそから見れば、姿や光が欠けることのない月も、私からす

れば曇らない夜はない（ずっと曇っているようなものだ）。設問では「作者の心情に触れつつ」とあるので、気分が晴れないとか、どこか塞いだ気持ちにずっと見舞われているとか、都が恋しいといった情感についても、解答として触れるのが望ましい。

問七 都に早く帰りたい、恋しいと思いつつも、旅先道中の、なじんだ浦風に心落ち着くようなところもあって、我ながら矛盾した思いだということ。なお、この時点でまだ都には帰っていない。＜都に戻りはしたが、いまさら尼崎が恋しくなってきた＞などと解釈する解答がみられたが、それは誤りである。

問八 来た方向を振り返ってみても、遥かに霞が隔てて はっきりとよくうかがえないといった意。直前に、「来し方も遥かになりぬるも心細く」とあり、さらに「梢を顧みれども隔たり霞む雲井ばかりを眺めて」とあって、ほとんどそのままこれを歌にしたようなもの。この地の文を踏まえて、「そこはかとなし」に作者の心情を重ねつつ読解しても可であるが、設問はこの歌を現代語訳せよということなので、あくまで歌の表現だけに即して、霞に隔てられてはっきりと見えない、うかがえない、といった解釈で止めてもよい。

Ⅲ （配点 50 点） 出典：〔晋〕袁宏『後漢紀』

姜肱の徳の高さを称賛する逸話。その徳行は、三段階で示される。まずは、死を賭して庇いあう姜氏兄弟の姿に、盗賊が感動し、命も金品も奪わずに去った話。第二に、兄の姜肱が、盗賊が見逃した銭まで自ら与えようとした話。第三に、盗賊が受け取らなかった銭を、亭長に委ねて立ち去った話。

第一の話は、現代人の感覚でも共感しやすいが、第二、第三の話は、なぜわざわざ盗賊に銭を与え、一度与えたものを再び受け取ることがないのか、理解しがたいかもしれない。だが、ここまで極端な行動をとるからこそ、盗賊も感動し、徳義の人だと称賛されるのだ。文章をよむ際には、自分の常識に当てはめてストーリーをねじ曲げることなく、書いてあることを丹念に読み解いて、文意をとっていこう。現代とは異なる価値観や行動様式を知ること、漢文をよむ楽しみの一つだ。

問一 基本的な読みを問うた。a「と」、b「ともに」、c「いはゆる」、d「なほ」。どれもよくできていた。

問二 書き下しの問題。正答は、「ぎにあらずんばおこなはず」。「非～不…」で、「～にあらずんば…せず」と読み、「～でなければ…しない」という意になる。前半の「非～」が条件節になっていることがポイント。「ぎにあらざれば」でもよい。

問三 解釈の問題。文脈にそって「在前」を解釈することが大切。ここでは、兄（姜肱）の「年徳」が「在前」なので、「兄（姜肱）のほうが、弟（季江）よりも年齢が上で徳も勝っている」こと。

問四 現代語訳の問題。「之」が兄を指すこと、「何」が反語であることを押さえたうえで、「どうして（徳のある／家の英俊たる）兄を殺害していいわけがあるのでしょうか、（いやよくない）」という意味の訳ができればよい。

問五 書き下しの問題。「われをころすにしかず」。「不如～」は「～にしかず」。正答率は高かったが、「に」の脱落した答案がまああった。「殺我」は、動詞＋目的語構造なので、「われをころす」。「を」を落さないこと。少数だが、「殺」を「しいす」としたものがあつた。「しいす（弑）」は、下の者が上の者を殺す（臣下が君主を殺す、子が父を殺すなど）ことなので、ふさわしくない。

問六 （a）内容把握の問題。「盗賊が、奪おうとした金品を置いて立ち去った」ことが書いてあればよい。よくできていたが、「物」を、刃物、武器と誤ったものがあつた。傍線部6にある「物」とも重なるので、文章全体を読めば、誤解は避けられるだろう。

（b） 内容把握の問題。直前の「二君は所謂義士なり」というセリフに注目すれば難しくないだろう。解答としては、「姜肱と季江の兄弟がともに道義に厚い立派な人物だということが分かり、感動したから」という意味のことが書いてあればよい。盗賊が道義に感銘をうけて、金品をとらない、ということは、傍線部6直前にも「賊之に感じ、亦た復た取らず」とあり、ヒントとなろう。

問七 現代語訳の問題。例えば、「肱は金品がすでに一度盗賊の手元に渡ったものであるため、これを宿場の長に託し委ねて立ち去った」。姜肱が盗賊に金品を与えようとしたこと、盗賊が受け取ろうとしなかったこと、を踏まえたうえで、原文に即して訳せばよい。「委」を、盗賊の捕縛を委ねた、強盗の証拠の品として渡した、とするものがあつたが、文脈にあわない。